

末摘花と光源氏

上野 辰義

〔抄 録〕

常陸宮の遺子末摘花との出会いは、光源氏にとってどのような意味をもっていたのか。従来は、構想・構造面からの考察が多いが、本稿では源氏物語を光源氏の物語と捉えて、超人的主人公光源氏の人生におけるの意味を考える。折口信夫が言う、光源氏の人間の成長、それを可能とする折々の反省に注目するのである。

すると、石長比売の神話的イメージのほかに、老女をも受け容れた伊勢物語の昔男的な理想継承の姿も改めて注意されてくる。その具体的な仕組みと展開を読み説いてみる。

キーワード 源氏物語、光源氏、末摘花、夕顔、反省

はじめに

「末摘花は光源氏にとって何であったか」、この問題を、室伏信助氏はまさにこの標題の論文において、「課題はいわゆる登場人物論としての末摘花を対象化するのではないだろう。主人公光源氏にとって、末摘花という人物がいかなる意味をもって登場させられるか、ということであろう^①」とされ、「醜貌の山の神、末摘花は、光源氏の保護を得ることで逆に紫の君を引き立て、物語的理想の実現に内面的に加担し、やがて源氏の世界の確立と栄光を導く重要な担い手であったと見

ることは、却つて余りにも民俗学的に過ぎようか」と、末摘花の存在意義を考えられた。同じく高崎正秀氏^②の論を踏まえつつ、鈴木日出男氏は、大山津見神の娘、木花佐久夜毘売に、物の怪に取り殺された夕顔があたり、盤石の堅固さ醜さを持つ石長比売に末摘花があたるとされ、一種の神婚とみられる末摘花との結合により光源氏は、夕顔頓死、それゆえの罹病、藤壺恋慕の彷徨による生命の危険など、彼をとりまく死の影から護られ、また、末摘花を終生後援することで、光源氏的心灵さの美德が証され、へいろ^③の人の人間像が確保されることになったとされた。もつとも、木花佐久夜毘売の直系は、末摘花と対偶

の位置にあり、「山の花盛りに見出され、霞の間より咲きこぼれた樺桜に喩えられる」紫上とする説もある。

こうした視点は、作品の深層と意味の始原を読みとる上で有用なものであるが、「主人公光源氏にとって、未摘花という人物がいかなる意味をもつて登場させられるか」を、光源氏が未摘花と出会う未摘花巻を、石川徹氏の言われるように「短編小説として見ずに、光源氏一生の伝として見る長編の見方からいえば、この若げの過ちに、光君の人間の成長を助ける、いわばその人生航路上の一つの試練としての意義を持たせてもいるのであって、未摘花との出会いは、光君という人間に幅や深みを増し、いわゆる禍福転移の道を開いたことにもなる。

松尾（聰、稿者注）氏の指摘のように、彼の人間形成に参与していると見ていいであろう」と、理解すれば、より作品の本文に即した問題として検討がしやすくなってくる。平安朝文学の民俗学的理解に大きく貢献した折口信夫も既に、光源氏の未摘花体験について、「高い位置にをる男性は、色好みの徳を備へてをらねばならぬ。その色好みの條件として、變つたものがある。それは、醜き女、年老いたる女にも逢つてやる、と言つた事を誇りとも、又色好みの完成とも考へて居つた様である」と述べていた。

そして、源氏物語を「光源氏一生の伝として見る」時、これも折口信夫が「反省の文学」で、「光源氏の一生には、深刻な失敗も幾度かあつたが、失敗が深刻であればある程、自分を深く反省して、優れた人になつて行つた」、そして読者である「我々は此物語から、人間が大きな苦しみに耐へ通してゆく姿と、人間として向上してゆく過程を

学ばなければならぬ」といい、光源氏が人生の修行の過程でおかしたあやまちを反省して、神に近づこうとする向上心を見るべきだとした読み方が大きな意味をもつてくる。こうした反省の積み重ねは、阿部秋生氏が先鞭をつけられた、光源氏晩年の諸回顧・述懐に繋がっているものであるからである。よつてここでは、そうした「反省」という視点から、光源氏にとって未摘花とは何であつたのかを、検討し直してみたい。

一 未摘花巻における光源氏の反省

折口や松尾・石川両氏が、こうした光源氏の未摘花体験の意味を汲みとつたのは、いうまでもなく、光源氏が未摘花との関わりを後悔した次の箇所による。夕顔を某院で亡くして一年後の八月二十日過ぎ、初めて常陸宮邸で障子を鎖し隔てて未摘花と対坐した際、彼女のつくる異様な沈黙に勝手を違え、ライバル頭中将優勢の疑いも抱き、じらされて、仲介役の大輔の命婦が、光源氏は「おしたちて、あはくき御心などは、よも」お持ちでない」と口説いて、未摘花に光源氏との対面を説得していたその「あはくしき」料簡を、光源氏が女の側の希望の予測を裏切つて発動し、一方的に逢瀬を持つた後の反応である。

正身は、ただわれにもあらず、恥づかしくつつましきよりほかのことまたなければ、今はかかるぞあはれなるかし、まだ世馴れぬ人うちかしづかれたる、と見ゆるしたまふものから、心得ずなまいとほしとおぼゆる御さまなり。なにごとにつけてかは御心のと

まらむ、うちうめかれて、夜深ういでたまひぬ。

(末摘花二二四)¹⁰

逢つてみると男との対応の仕方知らない末摘花のあまりの引きこもりようを、育ち柄のためと大目に見るものの、「心得ずなまいとほしとおぼゆる御さま」、即ち後に記される「手さぐりのたどくしきに、あやしう心得ぬこともある」という欠陥も感じられて、困惑するほどに、失望した。二条院に帰つてからも、「なほ思ふにかなひがたき世にこそとおほし続けて、軽らかならぬ人の御ほどを、心苦し」と思い、予想外の姫の様に、親王の娘という身分を考えて同情すらするのであった。そこに、頭中将が来てともに宮中へ出向き、朱雀院の行幸関係の詳細が多く決定される日で、宮中で日を過ごし、末摘花への後朝の文は雨も降りだした夕方にやっと送られて来た。

「夕霧のはるるけしきもまだ見ぬにいぶせさそふる宵の雨かな雲間待ちいでむほど、いかに心もとなう」とあり。∴、「夜ふけぬ」とて、侍従ぞ例の教へきこゆる。

晴れぬ夜の月まつ里を思ひやれ同じ心にながめせずとも口々に責められて、紫の紙の、年経にければ灰おくれ古めいたるに、手はさすがに文字強う、中さだの筋にて、上下ひとしく書いてたまへり。見るかひなうちおきたまふ。いかに思ふらむ、と思ひやるもやすからず。かかることを悔しなどは言ふにやあらむ、とさりとていかかはせむ、われはさりと心長く見はててむ、とおぼしなす御心を知らねば、かしこにはいみじうぞ嘆いたまひける。

(末摘花二二六)

昨夜の対応時の様態のみならず、乳母子侍従の教えたこの返歌はとりあえず無難だったのだから¹¹が、生活の不如意があるとはいへ、料紙の選択、筆法、文字の配分など、当世風の教養と美を全く感じさせず、光源氏は累加的に失望する。そして、「かかることを悔しなどは言ふにやあらむ」と、この状態が後悔に相当するであろうことを自覚する。「悔し」「悔しさ」は反省に繋がりをうることばである。この箇所以前では、主人夕顔に先立たれた右近(夕顔巻)、光源氏が紫君を引き取つた後の心浅さを予想する乳母少納言(若紫巻)が「悔し」を用いているが、光源氏に関しては、某院で物の怪に夕顔を気取られた後、惟光が来る間に、「などてかくはかなき宿りは取りつるぞ、と悔しさもやらむかたなし」(夕顔)とあるのが、唯一の先行例で、かつ、彼にとつて最初の反省の場にもなつて用いられている。¹²

「悔し」の対象である「かかること」には、直前の「いかに思ふらむ、と思ひやるもやすからず」も入るであろう。末摘花の実態に失望するのみならず、それに随伴して生起している、逢瀬の第二夜に光源氏の来訪がないことで末摘花方が衝撃を受け傷ついているであろうことを思いやつて、光源氏自身の心にもやりきれない状態をもたらしてしまったことも、自身の失態、我ながらまれにみる不首尾な行動として後悔されているのだろう。そして、「さりとていかかはせむ、われはさりと心長く見はててむ、とおぼしなす」、そうはいつでも他の選択はない、末摘花の将来を末永く世話しようと、光源氏は敢えて決心する。この思いは二箇月ほど後、朱雀院の行幸も過ぎ、紫君を二条院に引き取つた後、雪の夜に常陸宮邸を訪れて、翌朝雪明りで末摘花

の姿を確認して宮邸を出る時にも同じように確認できる。少し長いが引用する。

いとあはれにさびしく荒れまどへるに、松の雪のみあたたかげに降り積める、山里のこちしてもあはれなるを、かの人々の言ひし葎の門は、かうやうなるところなりけむかし、げに心苦しくうらたげならむ人をここに据えて、うしろめたう恋しと思はばや。あるまじきもの思ひは、それにまぎれなむかし、と、思ふやうなる住みかにはぬ御ありさまは、取るべきかたなしと思ひながら、われならぬ人は、まして見忍びてむや、わがかうて見なれるは、故親王のうしろめたしとたぐへおきたまひけむ魂のしるべなめりとぞおぼさるる。橘の木のおのれ起きかへりて、さとこぼるまふ。うらやみ顔に、松の木のおのれ起きかへりて、さとこぼるる雪も、「名にたつ末の」と見ゆるなどを、いと深からずとも、なだらかなるほどに、あひしらはむ人もがなと見たまふ。御車いづべき門は、まだ開けざりければ、鍵の預かり尋ねいでたれば、翁のいとみじきぞいで来たる。むすめにや、孫にや、はしたなる大ききの女の、衣は雪にあひて煤けまどひ、寒しと思へるけしき深うて、あやしきものに、火をただほのかに入れて袖ぐくみに持たり。翁、門をえあけやらねば、寄りてひき助くる、いとかなくななり。御供の人寄りてぞ開けつる。

「ふりにける頭の雪を見る人もおとらず濡らす朝の袖かな幼き者は形蔽れず」とうち誦じたまひても、鼻の色にいでて、いと寒しと見えつる御面影、ふと思ひいでられて、ほほ笑まれたま

ふ。頭の中將にこれを見せたらむ時、いかなることをよそへ言はむ、常にうかがひ来れば、今見つけられなむ、とすべなうおぼす。世の常なるほどの、ことなることなきならば思ひ捨ててもやみぬべきを、さだかに見たまひて後は、なかなかあはれにいみじくてもめやかなるさまに、常に訪れたまふ。…。かやうのまめやかごとも恥づかしげならぬを、心やすく、さるかたの後見にてはぐくまむと思ほしとりて、さまことにさならぬうちとけわざもしたまひけり。

（末摘花二二二）

ただ、注意される点が、幾つかある。まず、荒れた常陸宮邸が帯木巻の雨夜の品定めで言及された「葎の門」の女を求める気持ちや強さ、それによる藤壺への思いが慰められると思っていること、いい点なしの女だが、自分以外我慢する男はいないだろうと意識していること、父親王の魂の導きで末摘花に引き合わせられたのだろうと考えること、白居易の風論、秦中吟重賦を想起して、門番父娘に同情し、その主人末摘花と、末摘花獲得のライバルであった頭中將を想起していること、彼女に対する経済・生活面の支援を決意すること等、二箇月前の後悔、決意がここでは多面的に、詳細に開陳説明されている。

つまり、二箇月前の最初の逢瀬の後悔時に、光源氏の末摘花後見の決意は基本的になされておき、その後の思惟と末摘花の正体露見時の体験とが、このような意識に結実していったと思われる。この光源氏の決意を、今井源衛氏は、「光源氏をして、姫君を見棄てまいと決心させるあたりは、作者のあらわな観念の焦りが見え、光源氏のレア

リテイは失われている」¹⁴といわれるが、光源氏がこの決意をする経過をしつかり跡づけて、光源氏の内面の実態を検討する必要があるだろう。

二 夕顔追慕と葎の門

光源氏の末摘花との出会いは、彼の夕顔追慕の情が根源にあった。

思へどもなほ飽かざりし夕顔の露におくれしこちを、年月経れどおぼし忘れず、ここもかしこもちとけぬ限りの、けしきばみ心深きかたの御いどましきに、けぢかくうちとけたりしあはれに似るものなう、恋しくおもほえたまふ。いかで、ことごとしきおぼえはなく、いとらうたげならむ人の、つつましきことなからむ、見つてしかな、とこりずまにおぼしわたれば、

(末摘花二〇一)

光源氏が属する上の品の女性たちの、光源氏をめぐる意地の張り合いと気詰まりさに、夕顔との「けぢかくうちとけたりしあはれ」の体験は稀有のものであった。そのため、「ことごとしきおぼえはなく、いとらうたげならむ人の、つつましきことなからむ」女性を、性懲りもなく求め続けるのだが、藤井貞和氏は、この「けぢかくうちとけたりし」について、夕顔巻に「海人の子なれば、とてさすがにうちとけぬさま」とあるものの、そのすぐあとに「よろづの嘆き忘れてすこしうちとけ行くけしき、いとらうたし」とあるので、この部分の光源氏の回想は正しい、だが、夕顔はついに名のらず、右近から「世の人に

似ずものづつみをし給て」と言われているから、夕顔は「つつましき」女性であり、光源氏の思う「つつましきことなからむ」女性というのは、「夕顔型の女性とちがう人をもとめよう、ということになり、「そのひとつの回答が」若紫巻での「幼女的な女性、紫上であろう」と言われる¹⁵。もつともな解釈であるが、「つつましきことなからむ」の主体を夕顔でなく光源氏自身とすることはできないだろうか。光源氏自身が「つつまし」く思うことのない、気兼ねすることのない女性ととるならば、身分と素性を隠して一組の男女として対した夕顔は、「つつましきことなからむ」女性に該当するのではないか。引き取ったばかりの紫君は、いまだこの関係にない。

この「ことごとしきおぼえはなく、いとらうたげならむ人の、つつましきことなからむ」女性を、光源氏は、以下、帚木巻の雨夜の品定めで言及された「葎の門」の女に求めていく。そこで左馬の頭はこう言っていた。

さて(ア)世にありと人に知られず、(イ)さびしくあばれたらむ葎の門に、(ウ)思ひのほかにらうたげならむ人のとぢられたらむこそ、限りなくめづらしくはおぼえぬ。いかではたかかりけむ、と思ふよりたがへることなむ、あやしく心とまるわざなる。父の年老い、ものむつかしげにふとりすぎ、兄の顔憎げに、思ひやりことなることなき聞のうちに、(エ)いといたく思ひあがり、はかなくしいでたることわざもゆゑなからず見えたらむ、かたかどにても、いかが思ひのほかにをかしからざらむ。すぐれて疵なきかたの選びにこそおよばざらめ、さるかたにて捨てがたきもの

をば。

（帚木四〇）

ここにはいくつか条件がある。(ア)(イ)(ウ)(エ)である。夕顔追慕から派生持続する光源氏の女性願望である「(イ) ことごとしきおぼえはなく、(ウ) いとらうたげならむ人の、(ア・イ) つつましきことなからむ、(ア) 見つけてしかな」は、「(エ) いたたく思ひあがり、はかなくしいでたることわざもゆゑなからず見えたらむ」を除いて、左馬の頭の規定に、一応対応しているようだ。だが、葎の門の女は、「思ひやりことなることなき閨〔葎の門〕のうち」に「思ひのほかからうたげ」であったり、氣位を高く持ち、ちよつとした才芸にも教養や奥深さが感じられる女性がいる、その存在の意外性に魅力があるのだから、わずかな才芸であっても、当時の貴族層の持つ文化性・教養の深さを考えれば、(エ)の「いたたく思ひあがり」が(ウ)の「いとらうたげならむ」と対立するのか、両立するのか判断に迷うが(教養・知性の有無は自尊・氣位の程度と相關するだろう)、(エ)はその意外性を生じさせる言わずもがなの前提だったのでないか。ならば、夕顔追慕から派生持続する光源氏の女性願望「いかで、ことごとしきおぼえはなく、いとらうたげならむ人の、つましきことなからむ、見つけてしかな」は、雨夜の品定め「葎の門」の女規定にほぼそのまま沿つたものとして認めておいてよいだろう。ただ、その女は、「すぐれて疵なきかたの選びにこそよばざらめ」、つまり無欠の完璧な配偶としてではない、「さるかたにて捨てがたきもの」と位置付けられていることに注意しておかなければならない。

では、常陸宮の姫君未摘花は、その存在を世間に知られていなかっ

たのであろうか(ア)。父常陸宮は当然その存在を貴族社会において知られていだろう。琴の演奏に関して「父親王の、さやうの方にいとよびきてものし給うければ」と、光源氏が言っていることからすると、光源氏は直接常陸宮を知っていたようにも受け取れる。だが、娘については、大輔の命婦が未摘花の現況を語つた際の、光源氏の反応を見ると、存在についてはともかく、現況については知らずにいたようだ。

故常陸の親王の、末にまうけていみじうかなしうかしづきたまひし御むすめ、心細くて残りゐたるを、ものついでに語りきこえければ、「あはれのことや」とて、御心とどめて問ひ聞きたまふ。

（未摘花二〇二）

半ば、「葎の門」の女の条件(ア)に合う。(イ)の「さびしくあばれたらむ葎の門」に関しては、春の十六夜の最初の訪問時から、そのさまが語られていた。

いといたう荒れわたりて、さびしきところに、さばかりの人の、古めかしう、ところせく、かしづきすゑたりけむなごりなく、いかに思ほし残すことなからむ、かやうのところこそは、昔物語にもあはれなることどももありけれ、など思ひ続けても、ものや言ひ寄らましとおぼせど、うちつけにやおぼさむ、と心恥づかしくて、やすらひたまふ。

（未摘花二〇三）

透垣のただ少し折れ残りたる隠れのかたに、たち寄りたまふに、

（未摘花二〇五）

ここで、重要なことは、前者の引用例にあるように、宮の姫君とい

う高貴な女性が、古風に厳格に育て上げられた面影もなく、零落して、人生の不如意を体験して内面を磨き、こうした所（葎の門）には、説話・虚構の昔物語にも、しみじみとした事件もあつたことだと、光源氏は思つて、末摘花にこの場で直接接触を試みようかと思案したこと、だが相手の身分を考へて躊躇した、ということだ。零落した女性の内面のよき、あわれさを期待するのは、雨夜の品定め、左馬の頭の論からは直接は出てこない。これは、落窪物語に示された、交野の少将が持つ女性の好み、あるいは、当時の社会・人びとの体験的な認識によるものであろう。

「その御母おはせぬこそは、いと心ぐるしくあはれまさらぬ。我が本意には、いと花やかならざらむ女の、思ひ知りたらむが、かたちをかしげならむこそ、唐土、新羅までもとめんと思ふ。ここにおはする御息所はなち奉りて、父母おはする人やおはする。さて心に任せでおはすらんよりは、わたくし物にて、我が所に住ませ奉らん」
（落窪物語卷之一）¹⁶

ここでもやはり、そうした女性は私的な愛玩的存在なのである。落窪の姫は、中納言の娘だが、母は皇統の血筋の妾妻であり既に他界している。これに対し、末摘花は、故常陸の親王が晩年に儲けて溺愛した娘であり、零落しても、光源氏からは敬語を使用して待遇される、高貴な存在である。もちろん、下の品などではない。であるから、光源氏による末摘花への行動は心遣いさ、慎重になる。

こうして、末摘花は、「葎の門」の女の条件（ア）（イ）に一応適うが、予想外の感動、意外性の歓喜を生起させる原因である、（ウ）「思

ひのほかにはうたげならむ人のとぢられたらむ」、（エ）「いといたく思ひあがり、はかなくしいでたることわざもゆゑなからず見えたらむ」、については、具備せず、欠落していた。その具体である、末摘花の容貌、才芸のなさについては、周知のこととみなし、ここでは一々言及せずにおく。末摘花は、「葎の門」の女の環境的な条件（ア）（イ）は具足していながら、内面的な条件（ウ）（エ）は持ち合わせていなかった。であるから、光源氏が、そうした末摘花に近づいて行った理由は、仲介役の色好みの女性大輔の命婦のとりなし、頭中将との競合的心理状態も関係しているが、光源氏の主体的状況としては、夕顔追慕の情を持ち続けることで、「葎の門」の女の環境的条件を持つ末摘花の存在を知り、予想される内面の奥深さ、父親王の薰陶による教養、「らうたげさ」から、根柢のない容貌の美まで期待してしまふという趣きなのである。その具体的な様子、逢瀬後に生じる反省の種の存在は、頭中将に跡をつけられ競合関係が生じた、春の十六夜の最初の宮邸訪問後に語られている。

君達は、ありつる琴の音をおぼしいでて、あはれなりつる住まひのさまなども、やうかへてをかしう思ひ続け、あらましごとくに、「いとをかしうらうたき人の、さて年月をかさねるたらむ時、見もさまあしからむ」、などさへ中将は思ひけり。（末摘花二〇七）と、光源氏以上に頭中将は、「葎の門」の女に、妄想をふくらませているし、双方から末摘花に懸想文を送つても、いずれにも返事が来ないので、

おぼつかなく心やましきに、「あまりうたてもあるかな、さやうなる住まひする人は、もの思ひ知りたるけしき、はかなき木草、空のけしきにつけても、とりなしなどして、心ばせおしはかるるをりをりあらむこそあはれなるべけれ、重しとても、いとかうあまり埋もれたらむは、心づきなくわるびたり」と中将はまいて心いられしけり。

（末摘花二〇七）

と、頭中将は、無反応の「葎の門」の女末摘花に、光源氏以上に焦燥している。頭中将は帚木巻頭部でも、「すぎがましきあだ人」と紹介され、雨夜の品定め導入部でも光源氏をリードし、光源氏とともに左馬の頭の「葎の門」の女論を聞いていた。この頭中将の介入により、光源氏は、さほど深くも思い染まずにいて、文を送っても無反応な末摘花に興味を失いかけていたが、頭中将に負けを見るのが嫌で、大輔の命婦の仲介を懇願することになる。その時の言。

「おぼつかなくもて離れたる御けしきなむ、いと心憂き。すぎずきしきかたに、疑ひよせたまふにこそあらめ。さりとて、短き心ばへつかはぬものを。」

（末摘花二〇八）

ここで、姫は私を好色ものと疑っておられるのだろう、そうはいっても移り気の対応はしないのに、と、光源氏が言っているのは、逢瀬後、末摘花に「さりとて心長く見はててむ」と決意する原因になっている。命婦に介入を迫ったある種の誓いの言葉なのである。と同時に、光源氏が命婦に、女性が男の行動をゆつたりと大目に見られず、心外になじつたり嫉妬したりするから、男が悪いことになってしまう、そうでなく男に大様に構えて、口やかましい親兄弟もなくて気が楽な女性は、

かえつてかわいいであろうと、おそらく末摘花を意識しながらいうと、命婦は、さあ、とてもそのような風流なお泊り所には、とても、と似つかわしくなく見えます、ひたすら尻込みして引き籠っておられる点は、折り紙つきでございます、と、末摘花の様子を知らせると、光源氏が、

「らうらうじうかどめきたる心はなきなめり」と思いながら、「いとこめかしう、おほどかならむこそ、らうたくはあるべけれ」とおぼし忘れずのたまふ。

（末摘花二〇九）

とある。気が利いて才知ある性格ではないようだが、と、末摘花が「葎の門」の女としては、先の（エ）の条件、「いといたく思ひあがり、はかなくしいでたることわざもゆゑなからず見えたらむ」にそぐわな存在だと推量しながら、それでも、素直でおっとりとしていたら、かわいいことであろう、と同じく（ウ）の条件、「思ひのほかいらうたげならむ人のとどられたらむ」を期待しているのは、大輔の命婦の注意・警告を承知し、末摘花の才芸のなさを予知しながら、夕顔体験の認識成果である最後の美質「らうたげさ」を求めて末摘花に接触し、それにも失敗してしまうことについての、自己責任の下構えである。

末摘花と逢瀬を持つてその実体に対する期待外れの衝撃に、翌日末摘花のもとを訪れる気にもなれず、自他ともに嘆かせる結果を招いて、「かかることを悔しなどは言ふにやあらむ、さりとていかかはせむ、われはさりとて心長く見はててむ、とおぼしな」さなければならなかつた理由は、ここにある。それと同時に、光源氏がそれにもかかわらず、「思ひのほかいらうたげならむ人」を求めて、末摘花接触の失敗

に突き進んだ原因は、「いとこめかしう、おほどかならむこそ、らくはあるべけれ、とおぼし忘れずのたまふ」とあるように、夕顔体験が忘れられなかったからである。そもそも末摘花巻頭に、「いかで、ことごとしきおぼえはなく、いとらうたげならむ人の、つつましきことなからむ、見つけてしかな、とこりずまにおぼしわたれば」、とあった。夕顔追慕の情に突き動かされて、性懲りもなく、ここまで進んできたのである。

夕顔体験が忘れられなかったというのは、夕顔との出会い自体が、「葎の門」の女体験の変型で、かつ成功例であったからである。五条の陋屋の女の調査報告を惟光から聞いて、光源氏はこのように思っていた。

かの下が下と、人の思ひ捨てし住まひなれど、そのなかにも、思ひのほかに口惜しからぬを見つけたらばと、めづらしくおもほすなりけり。
(夕顔一〇七)

かりにても、宿れる住まひのほどを思ふに、これこそ、かの人の定めあなづりし下の品ならめ、そのなかに思ひのほかにをかききこともあらば、などおぼすなりけり。
(夕顔一一二)

夕顔の容貌も、光源氏の目を経て語られてはいないが、惟光が、昨日、夕日のなごりなくさし入りてはべりしに、文書くとてあてはべりし人の顔こそ、いとよくはべりしか。もの思へるけははひしと、ある人々も忍びてうち泣くさまなどなむ、しるく見えはべる。

(夕顔一〇六)

と、内面の「もの思へるけはひ」とともに、美人であることを報告し

ている。

夕顔体験と夕顔追慕の動機はこのように、光源氏の末摘花接近にほぐしようもなく、纏わりついている。

こうした状態は、春夏過ぎ、一年前の秋に五条で聞いた砧の音も恋しく思われるままに、常陸宮邸にしばしば音信を送るころまで続き、さらに、末摘花からの返事が引き続き無いことで、負けじ心まで加わり、逢瀬の失敗・後悔へと至ることになる。返事が来ないことを責められた大輔の命婦が、末摘花の容貌の真相は御簾越しに推測していても確認はできておらず、また性格才芸のありようについてはほぼ理解している状況で、光源氏の執心を気の毒に思い、姫に対して光源氏とすることを「もて離れて、似げなき御ことも、おもむけはべらず」と、微妙な言ひ訳をして、姫の「大方の御物づつみのわりなき」ためと返事の来ぬ理由をいうと、光源氏は、

それこそは世づかぬことなれ。もの思ひ知るまじきほど、一人身をえ心にまかせぬほどこそ、ことわりなれ、なにごともし思ひしづまりたまへらむと思ふこそ。そこはかとなく、つれづれに心細うのみおぼゆるを、同じ心にいらへたまはむは、願ひかなふこことなむすべき。なにやかやと、世づける筋ならで、その荒れたる簀子にたたずまほしきなり。いとうたて心得ぬこちするを、かの御許しなくともたばかれかし。
(末摘花二〇九)

と、この夏一つの山場を迎えた藤壺との「あるまじき物思ひ」(末摘花二二二)の紛らわしと連鎖した、夕顔喪失後の「葎の門」の女幻想を膨らませて、姫との対面設定を迫る。これに続けて、「心いられし、

うたてあるもてなしには、よもあらじ」と、命婦に誓つたのに、前述したごとく、末摘花の異様な沈黙と、競合を意識する頭中将の影にじれて、この誓約を破り、自ら部屋を解いて押し入り、逢瀬の失敗と後悔を招いてしまった。この大輔との誓約破りも、逢瀬後、「さりとていかかはせむ、われはさりともし心長く見はててむ、とおぼしなす」理由の一つとなっているのである。

三 光源氏の成長

光源氏は自分の過失ゆえ、末摘花との逢瀬の失敗と後悔を招き、原因を自覚して、「さりとていかかはせむ、われはさりともし心長く見はててむ、とおぼしな」したのだが、最後まで期待していた容貌面での手さぐりのあまりの不審さと、おそらく初めて目にした末摘花の返書の無風流な古風さに落胆し打ちのめされて、再びの訪問の足は遠のく。その後、次のように大輔の命婦の思い遣りを無視したことも反省し（これも末摘花を末永く後見しようと思う理由となる）、末摘花の氣落ちしているさまも想像して痛ましく思う。

心にくくもてなしてやみなむと思へりしことを、くたいてける、
心もなく、この人の思ふらむをさへおぼす。正身の、ものは言は
でおぼしうづもれたまふらむさま、思ひやりたまふもいとほしけ
れば、
（末摘花二一七）

さらに、紫君を二条院に引き取つて以後はその教育に熱中し、六条の貴女にさえ足が遠のくのだから、

まして荒れたる宿は、あはれにおぼしおこたらずながら、もの憂
きぞわりなかりける
（末摘花二一八）

と、末摘花のことを常に気にしながらも、訪問は億劫でたまらなかつた。末摘花との関わりは、光源氏にとつてそれほど衝撃なのだが、この素直な真情と、逢瀬後の後悔と反省による責任とのせめぎ合いの中で、冬の雪の夜に再び宮邸を訪れるまでになる。その思い起しの理由は、

またうちかへし、見まさりするやうもありかし、手さぐりのたど
たどしきに、あやしう心得ぬこともあるにや、見てしかな、
（末摘花二一八）

という、手探りの引つ掛かりも、暗闇の中、実物を見ていないがため
の不審で、目で確認すれば見直されるのでは、という期待であり、
翌朝前裁の雪明りに末摘花の容貌を確認するときの、

いかにぞ、うちとけまさりのいささかもあらば、うれしからむ
（末摘花二二〇）

という、男女の睦びを経た、打ち解け状態での容貌の見直し期待感で
あった。最初の逢瀬時の衝撃を少しでも回復しなかったのである。だ
が、露見した事実は、その髪を除いて、容貌、服装、所作のどれもさ
らなる衝撃を与えるものであった。そして、前々章で引用した、雪景
色の中での宮邸退出の場面が続くのである。そこで、松に雪の降り積
もる山里めいた風景を眼前に展開させる常陸宮邸を、まさに雨夜の品
定めでの葎の門は、このようなところで、ここに可憐で気がかりな女
を住ませたら、藤壺への思いも紛れるだろう、なのに当のご本人だ

けがこれにそぐわない存在で、何のいいところもないと思ひながら、「われならぬ人は、まして見忍びてむや」と考へて、最初の逢瀬時の反省、「我はさりとも心長く見はててむ」の決意を確認し、光源氏が末摘花とこのような関わりを持つことになつたのも、「故親王のうしろめたしとたくへおきたまひけむ魂のしるべなめり」と推量する。ここで、二人の引き合わせに父常陸宮の霊を想起したのは、雪の前夜、空のけしき激しう、風吹き荒れて、大殿油消えにけるを、点しつくる人もなし。かの、ものに襲はれし折おぼしいでられて、荒れたるさまは劣らざるを、

(末摘花二一九)

と、この時の宮邸に、昨春秋の某院での物の怪に夕顔を気取られた状況を重ねて想起していたからである。末摘花巻頭からずっと夕顔追想状態は貫徹しているのである。某院の物の怪に対比して、常陸宮邸の父宮の霊を想起した。それゆゑ、夕顔喪失時の某院での反省が、この場での反省にも影響を与えているのだろう。父宮の霊にかけても、末摘花を庇護しなければいけなくなつた。そのみならず、

世の常なるほどの、異なることなさらば思ひ捨ててもやみぬべきを、さだかに見たまひて後は、なかなかあはれにいみじくて、まめやかなるさまに、常に訪れ給ふ。

(末摘花二二三)

と、あるように、初逢瀬時はあまりの衝撃に足を向ける気力も萎えていたのに、露見後は一段と末摘花に同情し、誠実に常に訪れるようになった。翌年正月七日の節会のあつた夜も人目につかぬように訪れて、翌朝鏡台などを使って身だしなみを整えているように、容貌・才芸・所作にわたつて落胆した末摘花と情を交わしているのである。これは

雪の朝の言のように、回を重ねて「わがかうて見馴れ」たのみならず、伊勢物語六三段の昔男が、九十九髪の老女に「あはれがりて、來て寝」てあげたように、「思ふをも、思はぬをも、けぢめ見せぬ」行為ができるように成長したということだろう。折口信夫の言を用いれば、拙稿の初めに引用したように、光源氏が、色好みの徳を備えて、醜き女、年老いたる女にも逢つてやる、といった貴人としての誇りの発現や、人格の完成の一階梯とも見なせることからであろう。光源氏が、この段階に至る道筋も、夕顔追慕の情と夕顔喪失の反省体験、藤壺への行き場のない思いから癒されるべく、「律の門」の女を切望する光源氏の状況と、大輔の命婦のとりなしや、頭中将との隠微な競争意識などが縊り合わされて、丁寧に仕組まれている。そこを十分に読みとれば、「作者のあらわな観念の焦りが見え、光源氏のレアリティは失われている」とまでは言わなくてよいことであろう。光源氏の心情と成長に寄り添うことすら可能になる。末摘花は、光源氏にとつて大事な成長の糧だったのである。

だが、末摘花巻末、常陸宮邸から二条院に戻り、紫君を前にして行った、末摘花を虚仮にした戯れと言動は、表向きの思い遣りに対する、裏面の陰の人間の真実・真情のありようを描写したものと理解しても、これ以後、須磨・明石の光源氏流離の時代前後、具体的には蓬生巻で明かされるような、光源氏が末摘花に対して行つていった処遇は、末摘花巻に示された決意と反省に十分適合するものであつたのだろうか。そこには光源氏の人格のいまだの人間臭さや、物語の進展状況に応じた複雑な力の作用も与つているように思われる。一進一退しつつ変化

してゆく現実の人と、人の世のように。

〔注〕

- (1) 室伏信助氏「未摘花は光源氏にとって何であったか」『国文学』昭和五五年五月。
- (2) 高崎正秀氏「源氏物語の成立―未摘花伝承を中心に―」『源氏物語論』
- (3) 鈴木日出男氏「夕顔と未摘花―『源氏物語』の古代的構造についての断章―」『季刊文学』平成三年四月、『源氏物語歳時記』平成元年。
- (4) 小林茂美氏『源氏物語の表現機構』39頁。
- (5) 石川徹氏「未摘花」『源氏物語講座』三、有精堂、および松尾聰氏「未摘花の巻の一つの鑑賞」『平安時代物語論考』。
- (6) 『折口信夫全集』十四、国文学 第二部 日本文学の戸籍 第三章 源氏物語 第一節 研究篇―「未摘花」の巻を中心として―。
- (7) 『折口信夫全集』八。
- (8) 阿部秋生氏「光源氏の述懐」『光源氏論』、拙稿「光源氏の述懐―御法巻と幻巻との間」(『京都語文』16、二〇〇九年十一月)参照のこと。
- (9) 稿者は、源氏物語における「反省」の捉え方と、光源氏における未摘花巻以前のかつ最初の反省体験として、夕顔の頓死事件を既に分析して述べている。「光源氏の『反省』」『京都語文』23、平成二八年十一月。
- (10) 源氏物語の引用は、『源氏物語大成』による。一部本文・仮名遣いを訂し、漢字を宛て、送り仮名・濁点・句読点等を付した。漢数字は頁数。
- (11) 藤井貞和氏はこの侍従の代作歌を、「昔物語『月待つ女』」というのを引用するらしく、どうということもない凡庸な作風(『源氏物語論』288頁、と評している)。
- (12) 注9の拙稿参照。
- (13) 「秦中吟 重賦」をはじめとする白居易の詩との関係については、新間一美氏『源氏物語と白居易の文学』に詳しい。

- (14) 今井源衛氏「未摘花の問題」『日本文学』昭和三十年九月。この部分、同氏著作集第二巻に、「未摘花の造型」と改題されて収められている文章にはない。

(15) 藤井貞和氏『源氏物語論』272頁。

(16) 落窪物語の引用は、日本古典文学大系本による。

(17) 注9の拙稿参照。

(18) 伊勢物語の引用は、日本古典文学大系本による。

(うえの たつよし 日本文学科)

二〇一七年十一月十五日受理